

石川達三

望みなきに非ず

石川達三
望みなきに非ず

新潮社版

望みなきに非ず

石川達三作品集第三卷

昭和四十七年四月二十五日発行
昭和四十七年六月二十日二刷

定価 六〇〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(二〇)一一一
振替東京八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社
装画 下田義寛

目次

武漢作戰

転落の詩集

智慧の青草

望みなぎに非ず

解題

久保田正文

5

121

161

235

385

望みなきに非ず

武
漢
作
戰

武漢戦以前

蔣介石の抗日容共政策をやめさせる為に日本政府はあらゆる外交工作を尽してもみだし多額の費用をも使ったが、結局なんの利益をも齎さなかった。支那は日に月に抗戦準備をととのえ民衆の団結も強くなっていた。戦争は必至の状態であった。日本がドイツ、イタリーと防共協定を結んだのはソヴィエトと共に支那を孤立の状態に導き戦争の場合の日本を有利な立場に置く為の準備でもあった。

戦争は北京と上海とで終るべき性質のものではなかった。しかし南京を占領した時、日本の認識は多少の誤りを見せた。

日本人の潔癖な常識から云えば、首都を奪われたことは明確な敗戦を意味していた。駐支ドイツ大使が、この時ひそかに蔣介石にむかつて和平交渉をすすめたのは、日本の戦勝意識を反映したものであった。蔣將軍はこの和平交渉を拒絶し、最後の勝利を確信すると放言した。

こういう支那の態度に憤然として日本の発した声明がすなわち十三年一月十六日の「蔣政権を相手とせず」であった。日本はこれほどの大戦争をしたくはなかったが今では事情が變つて来た。漢口広東までも攻め落さなくてはならない。……南京に駐屯して和平交渉の不成功に帰するまで一カ月以上も休養し退屈していた兵士たちは改めて荷物を梱包しゲートルを巻きなおして第二段の戦闘に向わなければならなかった。徐州へ！

しかし徐州は最終的な意味をもった戦場ではなくて、武漢作戦の前哨戦でしかなかった。徐州の大包囲を完成すると同時に東方に殲滅戦を展開して行つた飯塚（元の加納）津田の諸部隊にあとを委せて、五月末から続々と大部隊が廬州に集結された。

この中には隨海綫遮断で勇名をはせた冲津部隊も居た。転戦数百里、蚌埠に部隊を集結してから西北蒙城に激戦を交え、広漠たる麦畑を三十里も突っ走って、この部隊に配属されていた岩仲戦車隊が不意に徐州の西十里の地点で隨海綫を襲った。……ついで徐州を占領してから津浦鉄道に沿って敵を追ひながら南下して来た。すると追われて逃げる敵の大部隊の正面が、蚌埠から北上して来た吉沼部隊に突き当り、友軍に相当の被害を生じてしまった。

作戰基地安慶

それからこの両部隊は南下して懷遠に行き更に西南の城西湖にちかい寿県と鳳台とを占領し、大別山の北を迂回して漢口作戰に参加する予定であつた。このとき黃河決壊の大洪水は広漠百里の沃野をひたし尽して、西肥河と潁水と淮河との兩岸にあふれはじめた。霖雨にたたかれてささくれ立った黄濁の水は秒速一メートル時速一里にちかい早さでやがて寿県と鳳台とに迫つて来た。敵軍にも弾丸にも逃げたことのない吉沼冲津の部隊も後退せざるを得なかつた。蒋介石の洪水戰略はこの時にはたしかに有効であつた。後走三十里、彼等は水に追われて東方の田家鎮に行き更に廬州に下つて、ここで武漢作戰の他部隊と合した。

そのほか、南京、浦口、蕪湖などにも幾つかの部隊が待機して廻江命令を待っていた。南京碼頭には大小無数の軍用船が長江を埋めて碇泊し、棧橋では荷上げの苦力が雨にぬれそぼつて米麦の吠をかつき醬油樽をかつき、河岸の倉庫という倉庫は彈薬と糧秣とで一ぱいになつてゐた。去る十二月、幾万の支那兵の血と屍とを呑んだ揚子江は、更に貪欲な表情を以て遠からずまた多くの血と屍とを呑もうとしていた。

武漢攻略戰は前線と後方連絡との關係から三つの段階に分けて考えられていた。第一段は湖口を含む九江の占領まで、第二は田家鎮要塞を突破して江北蕪春的の占領及び江南陽新の占領である。これらの都市は兵站輸送の關係から見ても重要な地点であり、そこを占領することによつて始めて大軍を前方に送り出すことが出来る事情であつた。そして最後の段階は武漢三鎮の攻略戰である。

九江攻略に先立つものは江北にあつては安慶、江南にあつては馬当鎮と湖口とである。安慶は安徽省の省城として人口七万、江岸に迫つた堅固な城壁をもち更にそのまわりと下流とに無數の陣地やトーチカを築いている。昔から安慶を失うものは長江を失うと言われた極要地で、江の北岸地区を制圧して進むためには先ずこの地を確保して兵站線を造らなければならない。またその上流四十キロの南岸にある馬当鎮は江岸の小さな部落にすぎず、上流と下流とに迫つた山が良い陣地というだけで一見重要な場所とは思えないが、後方にひらけた平地をもち、江岸をつたつて湖口に達する平坦な道路もあつて、兵站

の輸送路としては見落すことの出来ない地点であった。

六月初旬、軍本部は遼江部隊にむかつて準備命令を發した。蕪湖の下流四十キロの沖に、八日の夜から続々と集結して来た艦船はおびただしい数であった。宮森、高橋その他の陸軍部隊と、海軍陸戦隊岡本部隊などが、雨にけぶる長江の沖に碇をおろしてただひっそりと濁流に浮んでいた。

十一日、艦隊長官は谷公使と日高上海総領事とを通じて、蕪湖と湖口との間にある第三国の艦船に即時退去を要求した。そしてその夜遼江部隊にむかつて攻撃命令がくだった。駆逐艦と水雷艇とがこれらの船群を護衛して行った。

雨はまだ降りつづいていた。上流漢口から江口上海まで二百里にわたる雨雲が空を罩めて幾日となく降りつづいている雨であった。水は満々と兩岸の草をひたし水速は一時間六、七ノットもあった。午前一時半、闇のなかで船は中流に止った。安慶城の数哩下流である。上陸部隊は雨にたたかれながら手さぐりでタラップを下り小舟に乗り移った。

上陸開始、たちまち兩岸から敵の機銃が鳴りはじめ、駆逐艦は砲火をもって応戦した。武漢攻略戦の最初の戦闘がひらかれた。上陸部隊は二手に分れて江の兩岸にか

け登った。

安慶には敵の第二十師を率いて総司令楊森が居た。六月十二日の未明、日本軍が上陸したという通知が彼を愕かした。そして正午には城内至るところに砲弾が落ち始め、城外にある古塔の下の辺りで激しい戦闘がはじまっていた。城内の高い家屋から見ると水量の増した揚子江のうえ、極く近いところに日本の軍艦のマストが高々と見えていた。

楊森は午後はやく城外に撤退した。日暮れごろから城内には火災がおこり、支那軍は北門からなだらかな丘陵地帯にむかつて退却をはじめ、日本軍は東門を占領して陸戦隊が先ず城内になだれ込んだ。

翌十三日、宮森部隊は敵を追うて西北六キロに進み陸戦隊は江上を遼江しつつ二十キロ上流の華陽鎮にせまった。

安慶占領の報告をうけるとすぐに鋤柄兵站部隊が全速力で蕪湖から乗りこんだ。彼等は市街の中心にある官庁の建物を占領してここに本部をおき、先ず付近の民家を整理し学校を掃除して負傷兵の収容にとりかかった。兵站病院の開設。兵は手分けして民家の寝台を集めて来た。工兵廠の兵は砲弾で穴のあいた屋根と壁と床とを繕い、軍医は傷兵の手当をする一方、城内にある全部の井戸水

の検査をして歩かなくてはならなかった。コレラ菌やチフス菌を投げこんであるかもしれない。また野戦砲兵廠は安徽省政府の堂々たる建物を占領しその前の広場に敵が棄てて行った野砲迫撃砲機関銃などを百何十台も持つて来てならべた。これらの鹵獲品の上から大門の両方の柱に揚げられた抗日標語が皮肉な言葉をあびせていた。

——革命尚未成功・同志仍須努力！

安慶の大通りは立派に舗装されていて鈴懸けの並木が夏の街にひろい葉を茂らせていた。戦火が遠ざかると共に街々は異常な静けさに沈みはじめた。すると至るところの民家を占領して宿営している兵隊たちは銃器の手入れをしながらさびしがつて歌をうたうのであった。——いくさする身と空とぶ鳥は、どこの野末で果てるやら：いくさする身と空飛ぶ鳥はどこの野末ではてるやら。——彼等にとつてそれは悲しみの歌ではなくて、思いを郷土に絶ち愛着を妻子に断つたのちの飄々として枯淡な心境であつた。

安慶の陥落を待つて南京や蕪湖に待機していたあらゆる部隊が続々と船をつらねて遡つてきた。

特務機関がきて難民の生活状態をしらべ宣撫工作をはじめた。飢えたものには米や麦を与え病氣のものには薬をあたゑ家の無いものには家をあたゑなくてはならない。

また有能の士を探しだして自治委員会を組織するという仕事もある。憲兵もきた。これは友軍の軍紀風紀をとりしまると同時に難民にまじっている敗残兵を発見し処分を決しなくてはならない。

兵站衣糧廠が大変な荷物とともに岸に着いた。前線へ送るためのおびただししい米麦の吠と味噌醬油の樽と、木箱に詰めた塩鮭、乾燥野菜、牛肉と魚の罐詰、一週に一回配給すべき煙草と酒とビールと、一カ月に一度ずつ配給する便箋、歯ブラシ、手拭、チリ紙、揮などをもとめた包み、それから服と帽子と靴とシャツと。川岸の城壁に沿つて食糧品は山を築いた。

野戦郵便局がやつて来て大通りに旗をかかげた。街は賑やかになりはじめた。さらに唐沢自動車部隊の一個中隊が何十台の自動車を船に積んで上陸してきた。灰黄色のトラックが活動を始めた。衣糧廠から糧食をうけとり砲兵廠から弾薬をうけとつて、雨がはれると同時に黄塵のすさまじくなった城外の道を前線部隊まで日に幾度となく運んで行くのである。

前線は日々に進んでいた。北方の廬州から桃鎮、舒城を経て南下してきた部隊は、安慶の陥ちた翌の日桐城を占領してなおも南下をつづけていた。宮森部隊は高河埠のあたりでこの南下部隊をむかへ、そのまま西に転じて

潜山を攻めはじめたのである。潜山を抜けばそれから江の流れに沿うて西南に、太湖、^{しほく}宿松、^{きんばく}黄梅、^{くわん}広済。少なくとも広済の占領までは二百キロにわたる後方兵站線の大動脈を支えるものとして安慶は唯一の心臓の働きをしなくてはならない。北岸の運輸の道路はただこの一路だけしかない。楊森の軍が安慶と潜山との線を死守することなしに短い戦鬪で安慶を見すてたことは非常な失策であつた。安慶を制したるものは長江を制するのだ。南京から上流にむかつて、引きもきらずに輸送船がのぼつて来た。安慶へ、安慶へ！ 毎日後続部隊が珍しそうな顔をならべてぞろぞろと川岸にあがつて来た。毎日、彈薬と糧食とが船から積みおろされた。六月十七日、敵を追うこと五日にして宮森部隊は潜山を占領し、さらに太湖にむかつた。

そのころ安慶の川岸に着いた船からはおびただしいガソリンが積みおろされた。唐沢自動車隊のために。しかしそれはほんの一部分で、大部分は航空機用のガソリンであつた。安慶飛行場が出来あがろうとしていた。空色の襟章をつけた将校と兵隊とが街に見えはじめた。やがてこの街は武漢空襲の基地とならうとしていた。

馬当鎮まで

安慶のつぎに確保すべき兵站基地は江南の馬当鎮である。川筋の北岸は大方平坦地で要害の地は少ないが南岸はずっと低い山が迫つていて至るところに陣地がありトーチカがあり少なからぬ守備兵も配置されている。江を遡る艦船はこれらと戦いながらのぼつて行かなくてはならない。しかしこのあたりの敵を徹底的に追いまくつて守備兵を駐屯^{ちゆうとん}させてみたところで、それは武漢作戦に大きな効果をもたらしはしない。後方連絡の輸送路として不必要な場所であるからだ。安慶の対岸に上陸した高樹部隊その他は江岸の敵を追いながら上流にのぼつて行つたが、これもただ多少の威嚇^{いこく}をあたえるにすぎなかつた。先ず馬当鎮をとることだ。

安慶を基地にした海軍の掃海艇は濁流に沈む機雷をさがしながら一間二間と江をさかのぼつて行つた。掃海艇といういかめしい名をもっているが長さ三十尺あまりの小発（小型発動機船）にすぎない。乗組はたった〇人、それに機関銃が〇挺しかついてはいない。かなしきものは掃海艇の乗組である。敵は川岸の山に煉瓦^{れんが}でかためた

トーチカをもち、四角な銃眼のなから野砲と迫撃砲とをうって来る。水に突っこむ砲弾のすさまじさ、鈍い地響きをたてて水のなかで炸裂すると、水柱がまっしろに空にひろがってばざりと艇員の頭のうえに落ちてくる。

はじめは機銃で応戦をやってみたが、砲と銃とは戦いにならなかつた。無駄だと悟ってから、艇員はうつことをやめた。ただ黙って撃たれながら掃海作業をやるのだ。すると抑えられた闘志が機雷の方にむかってゆく。機雷が憎くてならなくなる。非常な熱心さで機雷をさがしはじめる。しかし、悲しみはさらに癒えない。機雷を発見し、危険な操作をして水面に浮び上らせ、機銃でうちまくって爆破させる。むなしき爆発が六丈の水煙を吹きあげる。けれども機雷は敵兵ではない。敵に何のいたでも負わせてはいない。敵兵は健在で岸から砲をうちまくっている。木の上の鳥を憎んでいたずらにがりがりと爪で土を掻く犬のようなもどかしさが艇員の心をいら立たせてゆく。しかも誤って艇が機雷にふれようものならば一瞬にしてあとかたもなく全滅してしまわなくてはならない。

「まあ、鉄瓶を引っくりかえて、灰神楽が立ったようなものだなあ。空から灰が降って来たみたいに、エンジンだろうが人間だろうが、一番大きな塊で二寸四角か

な？」

しかも艇員は進んで行った。

「掃海艇出発！」

岸で叫ぶ隊長の声が船のなかに聞えて来ると、「出発！」とくりかえして立ちあがり、岸につないだ綱を解き、舳を川上にむけて一本の煙草を啜え、煙を肩からうしろへなびかせながらだまって出かけて行くのであった。彼等の心を慰めるものはただ一つ、……いまに見てろ！ 掃海がすんで軍艦があがって来たら、トーチカだろうが掩蓋銃座だろうが、一ぺんにふっ飛ばしてくれから……そういう希いであつた。

敵の馬当鎮守備は安慶の比ではなかつた。部落の下方でずっと川幅がせばまっている。その南岸に立派な陣地をつくりあげ砲を据えて待っていた。ここを通る船はひとつ残らずうち沈めようというのだ。しかも安慶が占領されたのと知るとすぐに、七、八隻の汽船に砂利を満載して、まるで橋をかけたように一列にならべて沈めてしまった。激流のうえには汽船のマストが海苔をとる粗朶のように立ちならびその間には黒い煙突が傾いて水面に突きでている。航行は完全に遮断された。

ここまで遡ってくるともう掃海艇には手におえない仕事であつた。海軍廻江部隊はここで非常な苦心をした。

駆逐艦をもって敵陣地を攻撃しながら小艇を閉塞船にちかづけ、沈んでいる船の爆破作業をやらなければならぬ。それも昼間はとも出来ないから夜間の作業だ。水流は霖雨に一層はやくなつて時速七ノットもある。ほとんど不可能にちかい難作業である。

さらにこの作業に当って問題になるのは、閉塞船の付近にも機雷が多数に沈めてあるかどうかということであった。それさえ無ければ何とかなる。機雷があつては手がつけられない。数日の苦心探索ののち、挺身決死隊が数隻の小舟に分乗して閉塞船を爆破し水路を開くことができた。そこには一個の機雷も敷設してはなかつた。

こうして水路さえひらけてしまえば、もはや馬当鎮のまもりは恐るべきものではなかつた。下流の劉家宅に敵前上陸した陸軍の高橋部隊と江上の海軍部隊の攻撃によつて、六月二十七日の夕方、目ざす部落に突入した。霖雨の去つたあとの、百度を越える炎暑の日で、敵兵の新しい血を吸つた山や川岸の土はたちまちのうちに乾いて赤茶けた色の砂塵をまいていた。

馬当鎮さえとつてしまえば、南岸に沿うて上流の彭沢も占領できるし、それから鄱陽湖の入口を扼する湖口まではひと走りだ。このあたりには支那軍の五十三師、百十六師、百十七師などがうようよとかたまつてはいるが、

大して恐るべき敵でもなかつた。そして南岸を制圧してしまひさえすれば、湖口までの川筋は敵の攻撃をうけることなしに悠々として掃海作業がやれる。北岸は湖沼地帯で敵の守備はほとんどないからだ。

馬当鎮の小部落はにわかに重要な拠点となつた。輸送船が次々と上つて来ては部隊を上陸させ、部隊はただちに西南彭沢にむかつて出発して行つた。ここには瀨田兵站部隊がはいつて、糧食と弾薬と軍馬とを川岸一杯に荷上げた。安慶へ行つた唐沢自動車隊の三島中隊が兵站配属として上陸した。それから病馬廠の押川部隊の一部がやつてきて、川岸の楊柳のかげに馬欄をつくつた。この部隊には工兵隊が配属されていないので、獣医将校の指図にしたがつて兵隊は自分たちで馬欄や馬小舎をつくり病馬の手当もしてやらなければならなかつた。

いま、当面の目標は彭沢である。海軍は馬当鎮のブーム閉塞線を啓開するとすぐに掃海廻江をつづけ、毎日のように機雷〇〇数個を発見爆破していた。航空隊は彭沢と湖口とを空襲して砲塁を破壊した。そして陸軍部隊は南岸にそうて戦いながら進んだ。

彭沢は川岸のほんの小さな部落にすぎない。戸数は八百もない。しかし北方は江の濁流に面し他の三方は急な山にすっかりかこまれて、その山の峰から峰へ、古風な

胸壁がぎざぎざの多い曲線をつらねて、片意地に外部からの侵入を拒んでいる。山を越えて入るよりほかには道のない部落だ。陸軍部隊は山岳戦にかかっていた。

襲われる兵站線

馬当鎮の三島自動車隊が屋飯を食っているとき、兵站本部から至急の命令があるから来いという通知があった。「何だろう。輸送かな？」

三島中隊長は牛肉罐詰に箸を入れてかきまわしながらみな顔を見た。みなシャツ一枚になって熱心に丼飯を食っていた。

「野口伍長、行ってみてくれんか。俺の車を出させてな」「はあ、行きます」

伍長はもう四十ちかい年齢で立派な頬髯ほひげと顎鬚あごひげをはやしていた。彼は一種の發明家で航空機用の照明器具を發明し、工場を造ってそれを製造している男であった。彼は箸を置くと土間に長靴を鳴らして戸口へ立ち、左手の茶碗から湯をすすりながら外の空地を見まわした。車廠には三、四十台のトラックや乗用車が烈日に焼かれてならんでいた。

「当番居るか。当番！」

壊れた壁のかげからひょろりと丈の高い兵が出て来て、鉢巻の手拭をとって直立した。

「中隊長の車をな、すぐ用意させてくれ。すぐだぞ」

兵が走って行こうとすると伍長はおいおいと呼び止めた。

「お前だったかな、このあいだマラリヤをやっていたのは」

「はあ、自分です」

「すっかり治ったか」

「治りました。まだ少し疲れます」

「葉のんどるか」

「飲んでおります」

「お前、あまり丈夫そうでないな」

伍長は髯のなかでにつこり笑った。兵ははあと言って佯しそくに笑い、車を用意させますと復命し、踵かかとを踏みつぶした靴を引きずって去った。

それから三十分ばかり経って兵站から帰って来た野口伍長は歩兵の曹長を一人つれていた。

「帰りました。やはり輸送です。彭沢の手前にいる部隊まで。糧食がなくなってるそうです。トラック八輛ばかり出せばいいでしょう」